

# アメリカ禅仏教のこと覚え書き —MT・モナストリィの生活から—

アメリカ留学僧 島崎義孝



## 一 はじめに

本年四月上旬のある日、ゼン・マウンティン・モナストリイ（以下、ZMMと省略）の一行十人はニューヨークのケネディ空港を飛びたった。彼らは永平寺・総持寺といった日本の禅宗を代表する本山を参拝するとともに、同モナストリイ縁故の寺院や人々をたずねるために、およそ一週間の滞在日程をフルにつかっけて日本中を動きまわった。そして帰国する彼らを追うようにしてアメリカ入りした私が、こんどは彼らから生活全般にわたる薫陶をうけているわけである。そのひとりが日本滞在中の印象を私に語ったところによれば、方々で歓待をうけ、美しい建物や庭園を鑑賞し、日本の洗練された伝統文化を目のあたりにし、あるいは仏教行事を实地に参観することができて、全体としては快適

な旅行であった。しかし、不満がないわけではない。それは、日本にはあれだけ多くの禅宗寺院があり、僧侶も大勢おられるのに、「接心」というものに招じられたり、それを行っている機会には出逢わなかった。自分は日本の禅僧たち

に混じって本格的な接心に参加してみたかった、というのが彼の希望であった。

専門道場の接心に所詮は一介の外国人旅行者でしかない彼が、いきなり参加することは不可能だったとしても、どこか適当な場所を提供してやれなかったものか。十分な旅行準備が可能だったとは決して言い難い彼が、このような不満を抱いて帰国したことは誠に気の毒であったと思う。日々の生活を共にしている私としては同情せざるをえない。

そして注意したいのは、上のような不満はひとり彼から発せられるのではなく、旅行に加わったメンバーが一様に抱いている感慨であるら

しいことだ。じつさいモナストリーの日常生活を共にしてみても知るのには、彼らが日本の仏教にたいして並々ならぬ関心をもっていることである。今回の日本巡行中に収録したビデオテープ五十本、写真フィルム七十二本、録音カセット・テープ四十七本という数字は、旅行者の単なる記録の域を越えている。それはむしろ取材といった方が適当だった。こんなぐあいだから、日本で放送された△禅寺の生活▽とか、△東西靈性の交流▽といった類の番組は彼らも先刻承知しているし、それ以外にもメンバー一般の利用に供する資料は相当数たくわえているらしい。太い手巾をしめた私が臨済宗僧侶であることを、わざわざ説明する必要はまったくないのだ。

## 二 プロフィール

とついでZMMとは何か。

現在全米の仏教グループは四・五百とか、あるいはそれ以上ともいわれているが、ZMMは禅仏教関係では最大規模を有するもののひとつに数えられる、ロサンゼルス禅センターの支部的存在である。ニューヨークの中心部からハドソン河に沿ってキングストンまで百二十kmばかり北上し、さらに西へ三十kmほど折れたトレンパー山のふもと、エソプス川とビーバークル川の合流点に位置する。数年前、音楽フェスティバルで一〇〇万人近いといわれる若者を集めたウッドストックのすぐ近くにある、なんの変哲もないアメリカの田舎町だ。あたりには点在する住宅のほか山と森林しかない。

ZMMの中心をなすA字型の建物はもともとカトリック教会で、一九二七年の建造になるという。こんなへんぴな場所にあるのは大都会の喧噪を離れて、一時的な引きこもりに適しているからだろうか。それがZMMの手に移ったの

は一九八〇年というから比較的最近のことだ。

今日でも十字架にかけられたキリスト像が建物の正面外側に放置されたままで、取り除かれる気配はない。説明でもなければ、全体の雰囲気からして誰しもキリスト教会だと思ふにちがいない。この建物から山の方にむかって、そのままゴルフ場にもなりそうな芝生のゆるい斜面がひろがる。途中から大ぶりの雑木林に覆われ、それが山頂まで続いているらしい。雑木林のなかにはあちこち無愛想な機能本位のキャビンが建てられており、朝夕の坐禅に通う人たちがここで思いおもいの生活をおくっている。積雪の多い冬場などは通うのに随分困るそうだ。いわゆる境内地に相当するのは二百エーカー、日本的にいえば、およそ二四万坪というから、一ヶ寺の占める面積としてたいへんな広さだ。それでも下を通る車の音が聞えたり、近隣に人の住む気配がよくわかる。狭い土地に角をつきあわ

せるように生活しているわれわれには見当がつかないが、こんな広さもアメリカ生活に慣れた人々にとっては別段意に介するほどのことではないらしい。同じニューヨーク州にあり、キャッツキル山をはさんで西に位置する臨済宗系の大菩薩禅堂を訪れる機会もあったが、ここは一六〇〇エーカーあるという。ゲートから禅堂までいわゆる参道に相当するものが三km以上もあり、途中は森ばかりで人家はいっこうに見当らない。車に乗り慣れたアメリカの人々さえ広いと感じるのはこのあたりのことらしい。

因に乗用車はこのあたりでは必需品で、ぜつたいに欠せない。どこからみても決して車の運転などできそうにないおばあさんがフルスピードで走り去ったりする。塗装がはげ、板金が腐蝕してボロボロになったぐらいいは序の口で、片方のライトがなかったり、計器類がこわれているのにもよくお目にかかる。最も興味深いのは

彼らがそんなことを意に介してない風にみえることだ。それでも経済観念は至極あたりまえで、燃費がよく故障も少ないとかで左ハンドルの日本型車はしごく評判がいい。

モナストリーの建物は一階がオフィス、典座（台所）、食堂兼リビングルームだが、他にも倉庫、作業道具の収容場所にも使われている。長椅子、長机が中央にそれぞれ二列に並べられ、ふつうの食事はここで済ませる。さきに触れたキリスト像の真下は円形に段々がついていて、それを降りきつたところに両開きの重いドアがあり、すぐに黒ずんだ大きな暖炉が視界にとびこんでくる。ふぞろいなソファがあるかと思えば、足がいたんで今にもとれそうなロッキングチェアが割り込むようにおいてある。お茶といっても主にコーヒーだから、それ以外に各種のティーバッグがいつも用意してあり、休息の間やレスト・デーにも皆よく利用している。床

はオフィス以外はリノリウム敷きで、見た目には清潔をうだが、土足で出入りするので汚れるのははやい。仏教のプラクティス（修行）のための施設であり、はじめはキリスト教の教会だったとはいえ、飽くまでも仮物といった感じで、雑然とした印象を受けるのは致しかたがない。節目だらけの松材の厨子におさめられていた仏像が、わずかに仏教のかおりを漂よわせている。

二階は元の礼拝堂らしく、今はすべて木の長椅子をとりはずして板敷きのホールになっている。三階の廊下から見おろすと窓の小さなうす暗い部屋にしか見えないが、じつさいにここに立ってみると随分ひろく感じる。たぶん柱というものをまったく使わないからだろう。正面の一段高い△祭壇▽には仏陀像が安置してあり、三具足しか使っていないのはかえってすがすがしい。禅堂としてだけならこれ以上必要はないのだが、どうじに本堂でもあるからだ。五十人

は充分に坐れるようにできている。坐禅のときに曹洞宗では円形のお厚い坐蒲というものを使うが、ここではその下に方形の坐蒲団を敷いている。臨済宗の専門道場などで単蒲団といっているが、長方形の蒲団を三つ折りにして使うあのやり方との中間的な形態といつてさしつかえないだろう、日本では臨済宗、曹洞宗といえど一部を除けば境界ははっきりしているが、アメリカでは日本に倣って一応、何々宗とはしていても日本のそれとははっきり異なる。現にこのモナストリーのアボット（任職）も副アボットも日本の曹洞宗の本山で《瑞世》といつて正式に曹洞宗僧侶の資格を得、しかもモナストリーじたい認可の《参禅道場》だが日本のやり方とは全般的にいつて明らかに一線を画している。それは臨済宗を名のついても同じことだ。

話は少し跳ぶが、禅仏教がこんにち多くのアメリカの人々に関心をもたれるようになった背

景には、臨済宗で伝統的な教育方法として採用されてきた《参禅》が大きな役割りを果していると思う。エルンスト・ベント氏の言を待つまでもなく、禅仏教を西洋社会に広く伝えたのはほとんどと言ってよいほど臨済《系》の人々だった。俗身であつても出家者と同じように悟りの道を歩むことのできる形式を仏教に与えたことが、従来から禅仏教の特質といわれてきたが、まさにこの点が出家仏教たらざるアメリカの仏教に適合してきたといえるし、さらに宗教的な経験の浅い人にも、たとえそれが禅スノミビズムといわれようとも、公案の奇抜さは関心を示すのに充分の魅力があつたと思う。しかも参禅という方法は階段を一段ずつのぼつていく楽しみ（一種の大きな誤解も含めて）を彼らに与えたのではないか。それをしも《アメリカンドリーム》になぞらえるつもりはさらさらないが、この方法はいたく彼らを刺激したはずだ。こん

なことを思いつくのはアメリカに来てから色とりどりの帯をしめた空手マンや柔道マンをしばしば見てきたからにほかならない。日本ではどんな段階があるのか知らないが、十種類もの色帯を使うことはあるまい。しかしアメリカではこのやり方は彼らに目標を設定させることで、練習効果に随分ちがいのあることをある指導者から聞いた。心理的には参禅についても同じことかといえるように感じる。ヨーロッパで数年前、日本の臨済宗のグループが《ヴィジブル禅》として、墨績をはじめ弓道、剣道の型を披露して好評を博したというのも似たような理由からではないだろうか。こうしたやり方がいいのかどうかについては異論もあるが、少なくとも人々の注意をひきつけるのに一定の役割をはたしてきたことはまちがいない。只管打坐や仏教儀式だけでは、継続して多くの人々を捉えていくことは難しかったのではあるまいか。要するにア

メリカの禅仏教はどちらの名称を使っていたとしても、混合型であり、しかもそれ以外の宗教の影響も多分に受けているのである。中国から日本に伝えられた禅仏教が日本の変形を加えられてきたように、現にアメリカでも同じことが行なわれている。

さて、Mtモナストリーの禅堂兼本堂は接心のときには食堂にもなる。広い境内をもっているにもかかわらず一室三役というのはいかにも手狭な気がする。坐りづめの接心の経験のある人にはわかると思うが、時間がくればそれぞれ本堂や食堂に出頭するのもいい運動になるものだ。ひとつところに坐り続けるのは苦しい。

そして二階の一部分と三階は長い短期の滞在者の私室にあてられる。各部屋はきわめて簡素でシングルベッドと小さなテーブル、椅子が置いてあるくらいだ。長期の滞在者になると荷物もしいに増えてくるが、1週間程度の接心だ

けに来る人だと手さげカバンひとつというところもある。なるべく質素を心がけるのはブデイストの心構えだとこの誰かが言っていた。しかし日本の道場とは異なって、もちろん男女とも別々の部屋だが、同じ建物の中で生活する。プラクティスの道場としてそれで問題はないのかと思っただが、すでに数組のカップルがあるらしい。逆に離婚後ここに来るようになったという人も結構たくさんいるということだ。

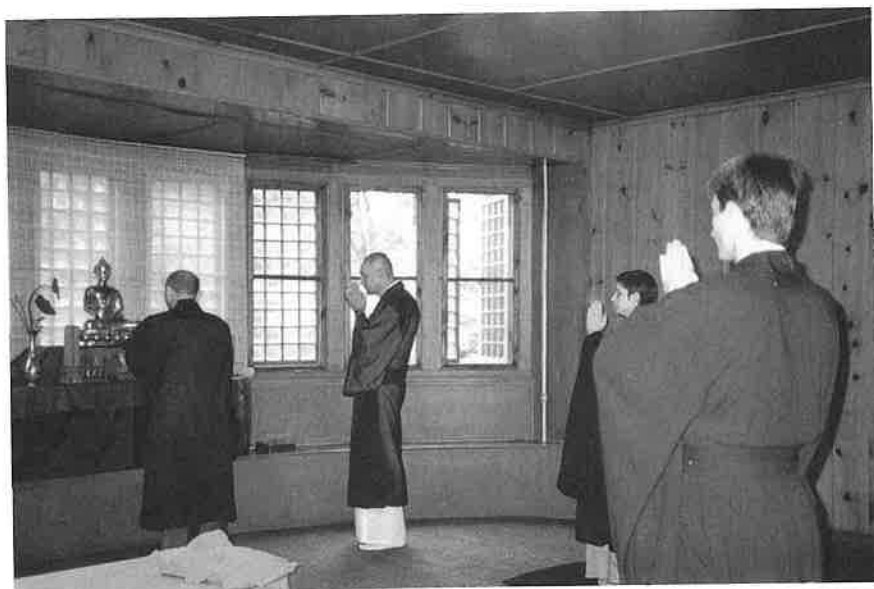
60年代のいわゆる対抗文化のひとつとしての仏教は今日どうなっているのか。それは伝統的な価値観の動揺に一定のすじみちをつける役割を担わされていたはずだが、むしろ今日のアメリカの価値混乱はより具体的な段階に入ったのかも知れない。伝統的な傾向である外国人の流入は絶え間なく続き、これひとつさえアメリカ人としてのアイデンティティを脅かすのに充分なインパクトであろう。加えて国際的な政治力

の相対的な低下、経済的な方面での長期的凋落、そしてより日常的なレベルではAIDSや離婚の問題などそこに生活者として住んでみなければ実感としてわからない問題を数多くかかえているらしい。以前ロス・アンジェルスの接心で一度に三〇〇人ちかい参加者があったという。会社の研究会や大学の接心ではない。それぞれ個々の意志による参加だ。その接心の主催者側にいた人が「あれはクレイジイだった」というのだが、禅仏教に関心をよせる者のなかで、いわゆる白人のインテリ層の占める割合が断然多いといわれてきたが、このことはいったい何を示すのだろうか、坐禅が彼らの失われたアイデンティティ確立のきっかけになるとしたら、それは不幸にもアメリカ人としての帰属意識から遠ざかるものではないのか。接心の週末から日曜日にかけて俄に数を増す彼らを見ているときまざままなことを考えてしまう。





バンティン・モナストリイ



ゼン・パ

## 三二 日常のスケジュール

ZMM は名称からしてもわかるように修行の場とし自らを位置づけている。いっばんに日本の専門道場で使う用語は、このモナストリイに限らず、坐禅をしているようなところでは、アメリカでもたいい通用する。ことばの不自由な私のようなものでもその点についてはとくに問題はない。たださきにもふれたように、ここでは飽くまでも日本の両禅宗を基本としながらも、アメリカ的コンテクストで行うと明言しており、その点形態的な類似性から日本的な観念を持ちこもうとするのがわれわれには結局なじめない最大の理由だと思われる。

まず年間のスケジュールから述べると、三月と九月からそれぞれ三ヶ月にわたる ANGO (安居) <sup>あんご</sup> があり、その期間中は言うまでもなく

SESSIN (接心) <sup>せつしん</sup> がくりかえされる。毎日の生活の時間割はもちろん季節によっても異なるが、今は三月からの安居の概略を示そう。

四時三十分

起床

七時〜六時三十分

坐禅

六時三十分〜六時四十五分

朝課

六時四十五分〜七時三十分

朝食

八時十五分〜十二時

作務

十二時十五分〜十二時四十五分

昼食

二時〜四時

作務

四時〜四時四十五分

坐禅

四時四十五分〜五時

晚課

六時〜六時三十分

夕食

七時三十分〜九時

坐禅、後消燈

晚課と夕食のあいだに一時間あるが、これは

アートプラクティス、ボディプラクティスのために費される。つまり各人がおもしろい運動や美術活動をするのである。内容には別に制

限がないようだが、彼らが現在行っているものは運動系では合気道、太極拳、空手、ジョギング、美術系では墨画、書道などで、これなども《ゼン》を意識したものでだろう。

上の時間割からみてもわかるように、決して敵しい内容ではない。かといってゆつくりできるほどの余裕があるわけでもない。三時の経の時間が短いのは般若心経(英訳)、消災咒しょうさいしゆ、大悲咒など短いお経を一卷読むていどだからである。英語で読みあげられる回向も慣れてみるとかえってはっきり意味が理解できるので好しい。

日曜日にはまた別の時間割がくまれている。起床は二時間近くおそく、逆にお経の時間が長くなる。この日は坐禅もちろんあるが、ほかに坐禅の後で法話(ダルマ・トーク)があり、外部のメンバーも多く集まる。正午にひと通り行事が終了し、昼食をとりながらの歓談風景が

方々でみられる。キリスト教会の日曜日の礼拝に行かなくなった人々が今度は《仏教寺院》に来るようになったともいえそうである。午後から火曜日の午すぎまではHOSAN(放参ほうさん)で、たまった用事をすませる者や遠くへ出かける人もある。なんのことはない週休二日制なのだ。またSeshinについても臘八大接心などと人を驚かすようなことを言わずに、時候がよくなる四月にチェリーブロッサム接心といたり、五月末の戦死者追悼日にあたるものをメモリアルデー接心というのめいかにもアメリカらしい。坐禅の時には並行してインタビュがある。これは臨済宗という独参で、ここの実質上の責任者はアメリカ人だが曹洞宗の僧籍をもつ一方、《KOAN》(公案こうあん)のプラクティスをあわせて行っている。このことは前に少し触れたZCLA関係のセンターで必ずみられる現象である。それらの中心であるZCLAには

△Roshi▽（老師）と呼ばれる日本人僧がおり、彼じしんが曹洞宗に属しつつ参禅を修行の方法としてとりあげていることから、弟子もそれに倣っているわけだ。弟子達のうち数人はすでにいわゆる飽参底で、アメリカやヨーロッパ各地でそれぞれの施設の責任者として活動をづけ、メンバーからは△Sensei▽という名称で呼ばれている。ZMMでもそれは同じである。

参禅といえたいはいはわずかの時間ですんでしまうものとはばかり思っていたら、ここではひとりずつの所用時間がずいぶん長い。いぶかしく思い、あるメンバーに理由を尋ねてみたことがある。すると住宅のトラブルとか交通事故の処理、夫婦間や子供の教育問題の不満を、皆述べたてているのだろうということだった。もちろんこれがすべてではないと思うけれど、毎日の彼らの様子を見てみると、型通りの公案のやりとりではすまないかもしれないと考えてし

まう。とにかく自己主義が強いのだ。これもメンバーで離婚経験のある男性が、アメリカの女は利己的で、はじめはいいがすぐに喧嘩になってしまうとぼやいていた。われわれから見るとどちらも似たようなものだと思うのだが、彼にとっては他人事ではすまされない。日ごとに生じる身の出来事をどう解決するか。これは彼にとってはまさに生きた公案なのである。いずれにしてもアメリカで他人の参禅の相手をしようと思ったら、公案の調べのほかにサイコセラピストの資格もいるようだ。

ZMMに来て興味深く思ったのは△TAN-GARYO▽（旦過寮）という制度を設けていることだ。これはもとより日本の専門道場に入門するさいの旦過寮を模したもので、この責任者の弟子になるための通過儀礼である。庭詰などはさすがにないが志願者は朝の五時から夕方五時まで一室にじっとしたまま閉じこもらなけ

ればならない。年間を通じて毎月中旬の週末に行われるらしい。そして一年後には受戒を受けることもできる。このときに黒の絡子をしるしとして与えられるが、いわゆる俗身のままでも、短かければ六年目でSHUSO（首座<sup>しゅせ</sup>）になることがある。その間にも細かいいくつかの位階があつていずれも名称がつけられている。一方、得度を受けて出家というかたちをとらせることもあり、別にただステューデントと呼ばれるだけで受戒もなしに生活している人たちもいる。

言うまでもないがZMMで行っているような細かい位置構成はここだけのものであり、同じZCLAグループでそのまま通用するわけではないしつまり全米にある他の仏教関係の集団ではほとんど意味をなさない、にもかかわらず彼らが熱心にこれに従っているのはどういうわけだろうか。私などから見れば、互いに顔と名前が一致するぐらいの小さな、しかも機能性や能

率性を重視するわけでもない集団では必要のない内部構成だと思ふのだが、これなども柔道や空手の帯の色と同じ関心からだろうか。

#### 四 接心のこと

彼らはそろえて坐禅が好きだと言い、じつさい熱心にとりくんでいる。休息の日とか、消燈後もしばらくの間坐っている姿をしばしは見かける。坐禅をはじめてまだ日の浅い人は、ほとんどふだん着のままだが、あるていど時間を経たものはグレーの、キリスト教の修道士が着るハビットのようなものをひっかけている。これは文字通りひっかけるといった感じでめんどうがない、ただ袖を通し、からだの前で紐をむすぶだけだからだ。最初ここに来たとき一炷四十分という長さにもかかわらず、経行<sup>きんぎょう</sup>のときにも坐を立たない人がいるのには驚いてしまっ

た。聞けばヨーガの練習も行っているらしい。しかしそれにしてもハビットの下は厚手のジーンズだ。生活習慣のなかで膝を深く折り曲げる姿勢の少ない彼らが、あれでよく長時間坐っていられるものだと感心した。脚を曲げたときに膝の内側が厚い布で圧迫されて不自由なはずである。しかし、よく観察してみると結跏趺坐している者はひとりもおらず、たいていは半跏趺坐のまままで済ましている。半跏もできない人は、折りまげた太腿とふくらはぎの間に十センチあまりの板をはさみ、その両端をやはり板で小さな蒲団とかパットみたいなものをいくつも用意している者もいる。ささえる正座椅子みたいなものを使っている。椅子ずわりの坐禅も欧米的というべきだろうか。

坐禅をするためにわざわざ日本に来るような人たちは、初めはできなくともしだいに慣れて、たいてい数年後には結跏趺坐しているようにお

もうが、環境のせいだろうかあえてそれを勧め様子もない。余計なこととは思ったがあるとき専従スタッフのひとりに、フル・ロータス(蓮<sup>だ</sup>華<sup>け</sup>坐<sup>ざ</sup>、結跏趺坐<sup>けつかふざ</sup>)が安定して理想的だ、現に釈尊像でハーフ・ロータス(半跏趺坐<sup>はんかふざ</sup>)などはひとつもないだろう、結跏趺坐にすべきだと言ってやったら、別に問題はない(ノー・プロブレム)と軽いなされてしまった。いや、それこそいらぬおせっかいだ。つまらぬ口出しをするなという返事だったのだろうか、ことばの不自由な私にはよくわからない。それにしても一般むけのパンフレットはまず坐禅の心構えから始まり、準備体操の説明をへてフル・ロータスに至り、坐からの立ちかたまで懇切に行っているのはどういうわけだろうか、あれは単なる案内書にすぎず、努力目標というわけではないらしい、経行のときに苦もなくすつくりと立ちあがる大部分の人たちを見ていると実に奇妙におもう。

坐から立つさい足のしびれでヨロヨロしたり、もたつくのは彼らの目には随分ぶざまに映ららしい。とにかくじつとして動かないでいることが、この人たちの坐禅に対する第一の関心であるように私には思える。

そんなこともあつてか概して坐相は悪い。初心者が多いせいもあるが、それはしかたがないとして、数年間ここで生活している者でも坐相にはほとんど注意を払っていないようにみえる。細かな様々な癖、少しずつちがう体勢、それらは瞑想の姿というよりはむしろ思索の型といった方がふさわしい。たまにリーダー格の者が検単にまわつても、よほどひどい坐り方をしていないかぎりまず矯正しない。じつさいいちいち坐相を直していたらきりがないほどなのだ。もつとも専従のリーダー達じしんわれわれの目から見ると信じられないほど無頓着に思えることがある。たとえば△叉手当胸▽をどうい

うわけか、いつの間にか腰の高さで両手を支えるように指導しているようなあんばいなのだ。

また、食事のときにも気にかかることがある。曹洞宗の道場で行うのと同じように、ここでも接心中のフォーマルな食事には応量器か、それを模した数種類のボールを使っている。今日の臨済宗で用いている自鉢は応量器の簡略化された形態だとおもうが、その自鉢しか知らない私は応量器の扱いの難しさに驚いてしまった。私などにはその手順が必要以上にいていねいだと思うのだが、それは、それとして彼らはみるからに習熟している。英語だが型どおり食事の偈を唱える。メニューは三品で、たいいていのばあいはおトミールか、グレンノーラという穀物に牛乳をかけたものが粥のかわりになっている。

汁椀にあたる器にはリンゴや汗ブドウ、バナナ、オレンジなどヨーグルトであえたサラダ、それに菓物のジュース、だいたいこんなものが



よく出る。日本の道場でも食堂は三黙堂のひとつで無言のまま食事を摂るけれど、決してくつろげるような楽しいものではない。ご多聞に漏れず、このモナストリイでも同じことがいえる。まるで競争でもしているようで、正味の所用時間ばかり短く、というのも曹洞宗の道場でやるように再請（おかわり）というものがなく、最初に一回ふるまわれるだけだからだ。食事のおわりに折水の偈を唱えるが折水をする者はほとんどない。だいたいちりダー格の者が器を洗い終わってしまうと、さつさとかたづけしてしまう。初めての人たちがこれをまねるのは当然だろう。言うまでもないがこの偈も英訳してあるので、文字の意味がわからないわけではない。知られるように折水偈にしろ生飯にしろ、それは生きとし生けるものと飲食の功德を分ち合うという願いをこめて行われる。いいかえれば人間にとって一日も欠かすことのできない

《食》という行為を通じて仏道を行っていくことをそれはさすのだ。だとすれば上のような事態は彼らの無理解に帰着するのだろうか。

このことは皆の食事の世話をする典座あたりで一層強く感じた。

他宗門では知らないが、こんにちの臨濟宗の僧堂で典座といえは二、三人の決められた係の者が安居期間中を努め、彼らが中心となって材料の準備、調理、あとしまつまで一貫して行う。多少の異同はあったとしても典座関係の役割は彼らの責任においてなされる。そのさい、出家者は生産活動をせず、また△五観之偈▽△三匙偈▽などに述べられた理由から、△浪費▽を極力戒められている。食堂には、〃一米粒重きこと須弥山の如し〃などと書いてあって身のすくむ思いをした人も多いだろう。このモナストリイでは一応の責任者においてメニューの作製や調理を行ない。必要に応じてスタッフを補充する。

殺風景な専門道場の典座とはちがって、ここには大型のフリーザー、オーブンもあれば大きな調理台、種々の器具類も常備され、井戸水はなにかわりに、アメリカのほとんどの家庭がそうであるように、ふんだんにいつでも使える給湯設備がある。ところが後のかたづけはじつにたいへんで、洗い物など五、六人でかかっても十分間でおわることはめつたにない。野菜の水切り器、各種計量カップ、数本の包丁、なべ・かま類。ほんの三種類ほどの料理をつくるのに、いつこれだけの器具を使ったかと首をかしげたくなってしまう。こんなぐあいだからひと通りすんでみると流しにはどんぶり一杯ほどの食べ残しが洗剤の泡に混じっているといったこともよくある。だが彼らは別に気にする風でもなく、さっさと捨ててしまう。文字通り法鼓の鳴物入りで、恭しく供えた仏飯が三十分も後には生ゴミのなかに放り込まれるのも諸行無常というべ

きたろうか。△百パーセントの自己集中▽とか  
△ZENが生活を通貫する▽などということばをしぼしば口にすることをから日常生活全般にわたって様々な注意を払っているはずであるが、どうしようもない観念の相違を感じさせられるのはこういう時である。

もうひとつつけ加えておけば、ある人数以上の人達が食事を共にするようなところでは食器洗い器というのがたいてい設けてある。熱湯のシャワーでまず大まかな汚れを落とし、こんどはそれらを金属性のザルにのせたまま大きなドラムに移し、密封してからもう一度そのなかで四方八方から熱湯をかける装置だ。さわれないくらいに熱いので、ドラムから出して放っておけば自然に乾燥する。ふきんなどもあまり使わず、紙タオルで用をすませるとあとはそのまま捨てる。どれもいかにもアメリカらしいやり方だが、貧乏性の私などはついつい費用の心配を

してしまふ。

## 五 経済・布教活動

ところで、アメリカの宗教団体が経済的な面  
でどのように運営されているのかわれわれにと  
つても関心のある問題だろう。とりわけ大部分  
の仏教諸集団のように比較的新しいグループで  
はどうなるのか。アメリカにおいて、仏教に関  
心を持ち坐禅でもしてみようかという人が増え  
たとはいえ、全体からみればまだ少数だし、そ  
れも流動的だ。ましてあるていど組織化された  
集団となると数も限られてくる。なによりも宗  
教全般が Non belief とか Invisible-religion と  
かいったことばで示されるように、しだいに教  
団とか教義といった表出したかたちをとらなく  
なりつつあるのは事実だろう。個人の好みが大  
きく作用するのである。したがって宗教集団の



応量器



厨子の中の仏像と仏舎利塔

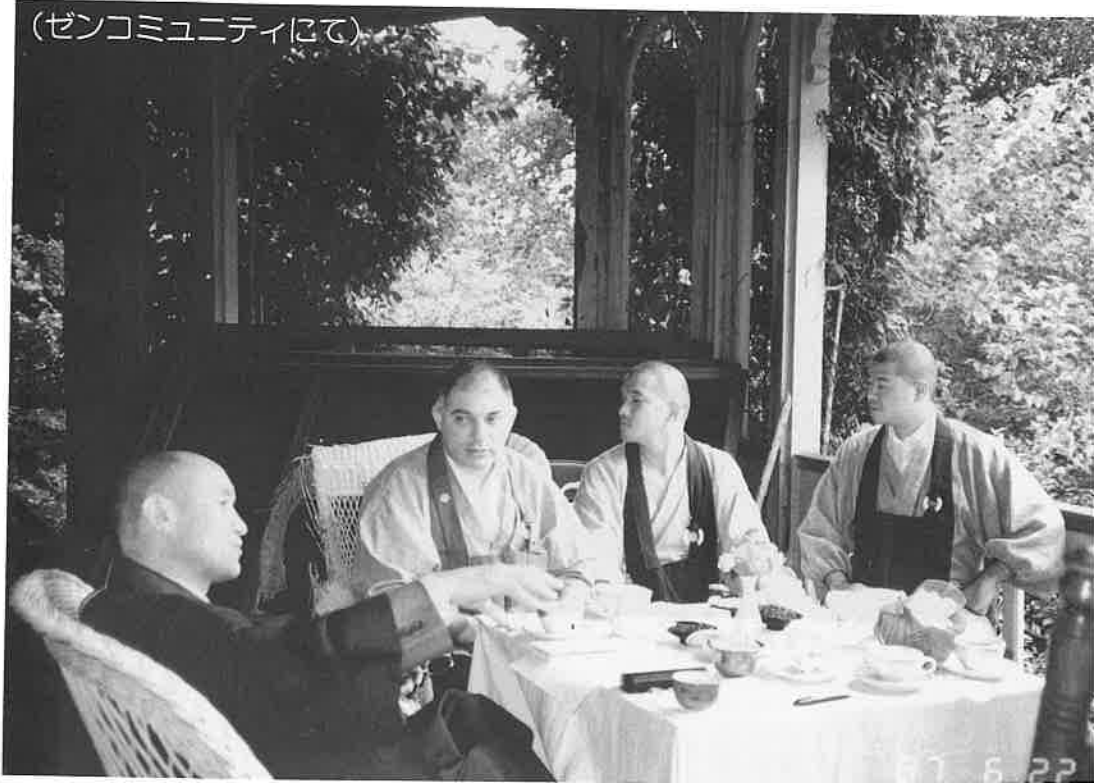
あり方も微妙に変化してこざるをえない。日本の大部分の寺院のように檀家をかかえているわけではもちろんない。アメリカカ社会にも日系の、いわばエスニック的な機能をおびた寺院があるが、ZMMなどとはもともと祖先祭祀とはまったくちがった動機からできているモナストリイであるから、法要等からの収入とは無縁である。托鉢は同国では禁じられており、そうした行為をうけ入れる文化的な伝統がなくなるとえ托鉢を行つたとしても単なる物乞いとしか見做されないだろう。かといってキリスト教の修道院のように仏教の修道者として彼らが直接に生産的な労働に携わるわけではないのである。さきにふれた大菩薩禅道などは幸か不幸か大口の土地・資金の提供者を得て、一挙に大規模な道場をつくることができたが、むしろこれは例外で、大部分の仏教集団は運用費の問題で苦慮しているようだ。現にこのモナストリイがそうで、土地



ゼンコミュニティ開山堂

と諸施設の確保のために常時寄付を募っている。一人一日五十セントを数ヶ月、あるいは数年にわたってお願いますというのだが、こんなところにも苦勞が窺える。あるときニューヨーク市内北部にあるカトリック系のホーリイ・トリニティに出むく機会があったが、礼拝堂の改修工事中で、折りしも新品のドイツからとりよせたという大きなパイプオルガンの搬入風景を目のあたりにすることができた。時価三〇〇万ドルという代物だそうだが、アメリカは比較的新しい国家とはいっても数百年の歴史の重みと、いうのはこういうところに出てくるのだろう。大部分の仏教集団など新参者には垂涎的といえるかもしれない、宗教集団として社会的に未だシステム化されていないがために、これらは集団じたいがフル回転しなければならぬのだ。こんなにちしかるべき指導者について坐禪をしようと思えば、わが国には専門道場とか各種の

(ゼンコミュニティにて)





ホール

禅会があるが、従来どおり来る者は拒まず去る者は追わずというのが基本的な行き方だろう。参会費などはまったく考えていないところもあるし、二泊三日ぐらいのあつまりでも数千円を



台所

要するだけで、たいていは坐禅後の茶礼に使う茶菓代ですむ、ところがアメリカでは、わずかに知った範囲では入会案内と活動状況を示すのはあたりまえで、費用まで明確に記してある。

いまはZMMが発行している雑誌△マウテ  
ン・レコード▽の数冊をもとに経済・布教活動  
の両面を簡単にみてみたい。

この雑誌は季刊ということになっているらしいが、実際には不定期である。二十センチ足らずのほとんど正方形で、全ページともモノクロームで統一されており、ところどころに挿入された美事な写真が文章の効果を高めている。面白いのは雑誌発行のためのスポンサーが六十件余りもついていることだ。ZMMは△禅芸術▽のセンターであることもうたいあげているところから、美術関係の人々が多く住むウツドストックあたりとのつながりが深いのである。本文は五〇ページにも満たないが、諸方面への発送部数は五百部を越える。有名な仏教経典の引用、アボット（住職）の法話の要約、さらに行事実施の概要、あるいはステューデントと称される参加者の感想、寄稿が大半を占めている。今頃

だとニューヨーク州南部の夏もけっこうむし暑く、一週間にわたる坐禅だけの接心というものがなにかわりに、むしろ△アート▽と彼らが称している方面の集まりが多いようだ。マウン  
ト・トレンパーの探索、日本庭園の鑑賞、墨絵、  
ティーセレモニー、キャッツスキル山でのキャンプ、天体観測などが、いずれも二泊三日の日程で行われている。指導者といってもとくに  
専門家がいろいろなくても、いわば素人ばかり  
の集まりなのだが、互いによく意見をかわして  
いる。費用は一切込みで百ドル前後だ。

夏期スケジュールがレクリエーションを中心  
に行われているのに対して、長期にわたる△安  
居▽のばあい全日程の三ヶ月間滞在すると千二  
百ドル、一ヶ月間だけだと五百ドルとなっている。  
他には週末だけの参加コースがあったり、都合  
でしばしば来ることのできない人たちのために  
はホーム・トレイニング・コースと称してオーデ

イオ・テープその他の貸し出しをしたり、どう  
じに販売を行ったりしている。音声だけでなく  
法話の風景をビデオ・カセットにして値段を  
つけているのは、いささか行きすぎの感がない  
でもないが、モナストリーの経営のことを考え  
ればそれどころではないのだ。

ただごく短期間の滞在者にたいしても相対的  
に言えば高額の参加費を徴集しながら、ムービ  
ング・ザゼン（動く坐禅）と称して、けっこう  
重労働をさせているのは、ごくふうの感覚か  
らすると理屈にあわないと思うのだが、これも  
許されてしかるべきだろうか。外部からの参加  
者が黙々と作務に従事しているのも、モナスト  
リーの台所が苦しいのを承知しているからだ  
ということにしておこう。専従のスタッフでさえ、  
食住の費用は支払わないとしても、月額百ドルの  
手当しか出ないのだから不平の出ようもないの  
だろう。

アメリカ仏教の活動は日本ではみられないよ  
うな方面にも及んでいるが、刑務所での坐禅指  
導などはその最たるものといえる。わが国にも  
教誨師とよばれる人たちがいるが、ZMMは女  
性を含む数人のメンバーが刑務所に出むいて受  
刑者と記念写真をとり、しかもそれを上の雑誌  
に載せているぐらいだから、こんなところにも  
それを彼此には考え方に随分とひらきがあるよ  
うに思う。服役者の顔写真が人目にふれること  
などわが国では考えられないことだ。しかもそ  
のうちの何人かは受戒をうけ、どうじに法名ま  
で授けられているという。そんなこともあつて  
か、かつて服役していた人が後になってZMM  
に逗留することもある。臆面もなく、自分はこ  
こへ来る前刑務所にいたと話したりする。周囲  
の人も別に気にとめる風でもない。とにかく何  
かにつけて彼らはたいへんおらかなのだ。ば  
あいによってはそのおおらかさがこちらをいら



いらさせることもあるが、いいことばかりはないものである。

## 六 アメリカ仏教の特質

ここではZMMでの生活体験をもとに、きわめて限られた見聞からだが、われわれの目から見たアメリカ諸宗あるいは仏教の特質について若干ふれておきたい。

### a、諸宗教間の交流

わが国では夢想だにしなかったことだが、ひとくちに言つてアメリカの諸宗教間の相互交流はすごさかんで、しかもごくあたりまえのことのように行われている。周知のごとく第二次バチカン公会議以後、カトリックではユダヤ教の否定をやめ、他宗教間との接触を積極的に深めており、日本でも臨済宗とカトリックに関係する人々が数年間隔で交互に修道の場を提供し

あっている。発生契機においては性格を異にする世界的な宗教が数百年来の外皮を打ち破つて相互に歩みよるといふことじたい、そのころみがいかに小規模なものであったとしても、まさに画期的な出来事であるにちがいない。だが少なくともアメリカという社会にあつては、このような異宗教間の交流はとりたてて宣伝する必要のない日常茶飯のことらしい。

ホーリ、クロス・モナストリイはハドソン河右岸の景勝地ウエスト・パークの一角にあり、ベネテイクト派に属する修道院である。修道院とはいえ、厳格な戒律のもとに共同生活を送る修道士のみの集まりというわけではない。ここでは創立いらい四十八室にもものぼるゲストルームを設置していることからわかるように、六十年以上も以前から修道士以外の外部の人々にも心身の活性化の場を提供してきたのである。われわれが居あわせた集会でも三十人ほどのな

かで、ほとんどの人たちはニューヨーク市内からの来参者だった。組織化された瞑想の方法としての坐禅にカトリックの人々が関心を示していることはよく知られているが、この集会というのもテーマはその線に沿っており、正規の年間スケジュールのひとつなのである。

中庭をはさんで礼拝堂に対した一室で、めいめいが坐蒲や椅子に坐わり、曹洞宗の黒の法衣と木蘭の絡子をまとったZENNIのアメリカ僧が禅宗の歴史や特質を語ることからその集会は始まった。彼は坐禅の実際の仕方を説明してみせ、柘木や引磬の用途、警策を使う意義とその実演を行うというぐあいだ、初めてのことだともみえて参加者は話の内容に強い関心を示していたように思う。修道院の側からは通常ブラックモンクといわれるベネティクトの法服とは異なり、すその長い純白のハビットを身につけた道士が、日本の禅宗寺院での体験をもとに、ベネ

ティクト会派の瞑想と坐禅の比較を行うというぐあいだった。

興味深く感じたのは、年配の夫婦がいるかと思えば若い画家生がいたり、アメリカ中西部からのすでに老人といっているような旅行者がまたまたこの集会のあるのを知って加わったというように、わずか数十人のあつまりであるにもかかわらず年齢層がまちまちだったことだ。しかも一般論としてではなく、自分が坐禅をすればどうなるかと、日ごろ行っている自分の瞑想と坐禅がもたらす体験はどうちがうのかとか、質疑応答したいが具体的に宗教というものに対する主体的な距離の近さを感じさせた。修道院というからには修道の場にはちがいないのだが、少なくともこのモナストリーに関するかぎり、△開かれた修道院▽を目ざしていることが強く印象に残った。このことはZENNIでみると同様に年間プログラムによっても了解でき

る。各目には多いときは六回、少ないときでも二回はそれぞれ三日間ないし一週間にわたる催し<sup>が</sup>が計画されている。キリスト教に関する内容<sup>が</sup>が中心であることは当然としても、太極拳の実習やハドソン河を探索する会<sup>が</sup>があり、ハイキングを楽しみながら花や石も鑑賞するといったことも行われ、さながら日本ではやりのカルチャーセンターの趣を示している。受け入れ側のスタッフもこれに応じて多彩で、修道士（神学者を含む）のほかには、生物学者・ダンサー・道化役者・小説家・音楽家・精神分析学者<sup>が</sup>おり、件の仏教僧侶もそのなかにちゃんと名をつらねているわけである。日本のキリスト教会のフアカルティに仏教僧侶<sup>が</sup>が加わるとか、あるいはその逆の場合もわれわれの感覚ではちよつと想像<sup>が</sup>がつかないのではないか。

またニューヨーク市のウエストサイド、アムステルアベニューから百十二番街にかけて広大

な敷地を擁するセントヨハネス教会の活動もわれわれの目には奇異に映る。ここはゴシック建築では世界一の規模といわれ、その豪壮な石造美のゆえに参拝者に混じって見学者の列が連日絶えることがない。カトリックではなくイギリス国教会に属する<sup>が</sup>、日曜日の礼拝日にはキリスト教の他の教派は言うに及ばず、アメリカになんらかの素地をもつ宗教集団にも宣教の場を提供している。総勢百人にも達するかと思われ、聖歌隊生の讚美歌を聴くのは初めてだったが、それにも増してアメリカ、インディアン、ユダヤ教、イスラム教・カトリックそれに禅仏教の代表<sup>が</sup>がそれぞれ祭壇にたつて自己の宗旨の説明を行ったのにははつきりいつて驚いた。日本でふつうよんでいるような漢音の般若心経<sup>が</sup>が単調な木魚のリズムにのつて、ニューヨークのど真中の大教会で唱えられようとは、それこそお釈迦様でも夢想だにされなかつたのではあるまい

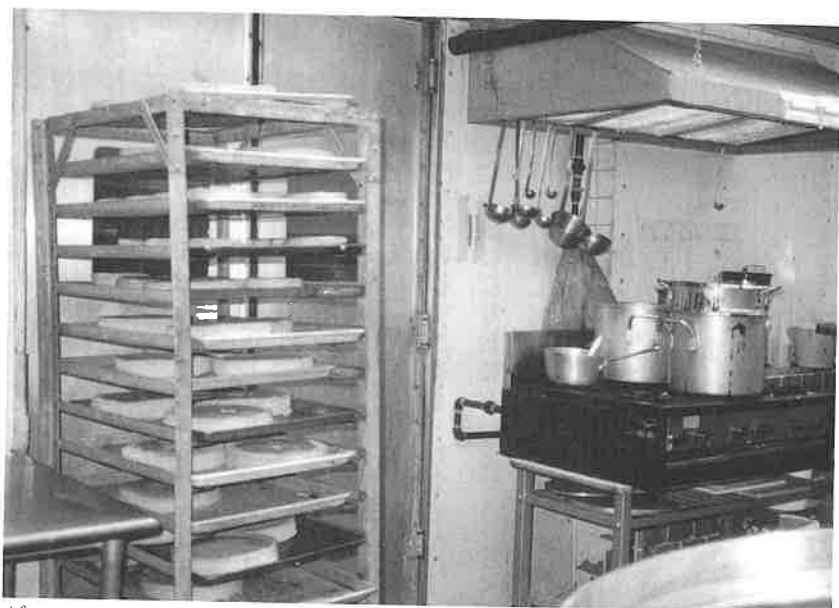
か。このときはたまたま行われなかったが、日本の神道で用いる白木の神棚の類も準備してあるのだから、私にはまさに驚きとしか言いようがない。しかもどれもが公平に扱われているという印象を強く受けた。

わずかの例から全体を推しはかるのは慎まなければならぬが、みてきたようにアメリカの宗教団体のある種の開放性は通性のようである。それは逆にいえば、特定の宗教の独自性もしくは内向性を強調しすぎると、社会ぜんたいから遊離した存在になりかねないということなのだろう。いずれにしてもアメリカ社会のもつ「メルティング・ポット」としての一面は宗教活動のなかにも強く現われているようにみえる。

こんなわけで禅仏教といえども他の諸宗教に對して、超然としているわけにはいかない。自然に何らかの改変をうけることになるのだ。

#### b 女性の参加

アメリカの禅仏教について語る場合、見逃せないのは女性が占める比重の大きさであろう。ゲリー・シユナイダーなどは、仏教創始から女性の本質的には排除されてきたがアメリカにおける女性の仏教へのかかわり方は特筆すべき革命的な事柄だとさえ述べている。彼の指摘をまつまでもなく、歴史的にいつて仏教の世界でも、女性はたえず男性に従属する地位におかれてきた。仏教史において比丘尼教団の成立はその可否をめぐって様々な問題が生じていたし、存在じたい決してわれわれによく知られているわけではない。このことはわが国においても同様である。比重が大きいといったのはここでは単に信者数の多さをさすだけではない。数のことに限ればわが国の今日の仏教儀式・行事への出席は、女性の方が男性よりも多いことかしばしばだが、いま言うのはアメリカでは女性



ゼンコミュニティ経営のベーカリー内部



ベーカリー全景

があらゆる面で同等の位置にあることをさす。たとえば毎日のサーヴィス(勤行)の導師を△尼僧▽がつとめ、他の大勢の男性が随伴するといふ光景はごくふつうに見られる。ZMMなどは女性のリーダーたちによって牛耳られているという感さえあった。そこまで行かなくても、女性がある仏教集団のなかで中心的な役割を果している例は枚挙にいとまがない。

こうした事態が生じるにはいくつかの理由があったと考えられるが、思いつくままに述べる、ひとつはアメリカにおいて仏教は当初から個人主義と万人平等主義とでも言うべき近代的な社会的諸価値のもとに始められたという事情がある。しかももうひとつには△出家性▽とということがほとんどまったくと言っていいほど視野に入っていない。

まず最初の点について、ZCLA関係の禪センターをみた範囲ではタテの人間関係という印象

は、英語ということばの性格からしてもきわめて希薄である。△Ross▽と呼ばれる日本人僧がおり、彼の数人の旧参の弟子は△センセイ▽と呼ばれ、各地でそれぞれ独自の宗教活動を行っていることはすでに述べた。彼らの主宰するセンターでは、彼らの判断とメンバー本人の希望によって、一定の期間をおきながら制度上の段階をふまえていくことも知った。そのさい仏教儀礼や坐禅のばあい、経験のふるい者、僧形により近い者が日本で行われるのと同様のはたらしきをする。いわば修行のいちおうの目安として設けられた階梯の序列が明確に機能するわけである。ここでは男女のちがいによる差異もない。ここにひいた例はその典型である。だがいったん日常生活のレベルでは、日本の禅堂で行われるような権威主義的もしくは形式主義的な枠はとり払われ、対等の人間関係にもどる。われわれには序列と考えられることも、彼らには役割

分担としか観念されていらないらしい。そして授戒をすませた者はダルマネーム(法名)で、それ以外の者はアメリカ風にファーストネームで呼び合うといったぐあいである。

また△出家性▽についてはアメリカではまったく度外視されてきたのではないかと思われるほどこの観念は薄く、少なくともアメリカを本拠として活動している禅宗僧侶で国籍・性別を問わず独身でいる人はほとんどないようだ。

ZMMでたまたま二人の女性が授戒をうける場に臨むことがあった。そのさい与えられた△十六の戒▽は最初に仏法僧のいわゆる三宝に帰依することを誓う三帰戒とならんで、十重禁戒の最後の三宝をそしらぬことを約する項目がとくに仏教にかかわることだった。他は一般的な倫理・道徳上のいましめで、ことさらに厳しく規制されているわけではなく、これは戒を授ける側と受ける側とのおのおのの现实生活をふまえ

ての配慮であり、アメリカ仏教の△戒律▽は日本のそれを通り越していつそう寛容なのかもしれない。

こんなぐあいだから女性で髪をたくわえたまま法衣を身にまとい、いっぽう日常生活を営むこともあるわけで、この点では日本の多くの男僧と五十歩百歩というところである。それに対して日本の尼僧方は不当におとしめられているといえよう。出世間の事柄からはそんなことはどうでもいいことなのだろうが、尼僧であることによって他に仕事をもったり家庭生活を営むことはほとんどなく、そのくせ教団内での発言力はきわめて限定されており、どこまでも縁の下力持ち的な存在である。しかも仏行にもっとも近いのはこの人たかかもしれない。それはそれとして、アメリカの禅仏教は形態的にはどうであれ、実質的には在家仏教の枠を出るわけではなさそうである。もちろんみてきたように

一方に出家集団があつて他方に在家仏教があるという意味ではない。

もつともアメリカの仏教といえども彼女たちじしんの立場からすると、女性の地位が十分に保全されてきたとはいえないらしい。その反動として十年このかた「女性とアメリカ仏教」というテーマで会議がくりかえされてきたという。このことじたい女性の仏教に対する関心の高さを現していると思うが、どうじに有力な女性指導者が輩出したことをそれは示している。じつさい上のような会議を主唱してきたのはこの人たちであり、なかには女性に対する従属と蔑視を看過しているような仏教のあり方は許せないとしてある仏教グループの指導者の地位をおりた人もいるときく。そして本年にはレノール・フリードマンという女性の心理療法家が、全米で活躍している17人の女性の仏教リーダーたちにたいして行った個別のインタビューを一

冊にまとめたが (Remarable Women, Shambhala)、すでに多くの共鳴者を得ているらしい。いづれにしてもこうしたラディカル性じたい、日本の仏教では部分的にはともかくほとんどみられないことであり、独立心のきわめて旺盛なアメリカ女性が仏教の世界においても今後どのように自己を展開していくか興味のあるところである。

以上きわめて乱雑だが、これまで11ヶ月余り過したアメリカのひとつの仏教グループでの生活体験をもとに思ったままをしてみるしてみた。思いがいや理解の及んでいないところも多々あるかもしれないが、諸先輩の叱正をこいたい。